

## 中央構造線を切るボーリングコア解析についての予察的報告(その1)

## Preliminary report on the analysis of the borehole core penetrating the Median Tectonic Line 1

# 重松 紀生 [1]; 藤本 光一郎 [2]; 木村 希生 [3]; 竹下 徹 [4]; 中島 隆 [5]

# Norio Shigematsu[1]; Koichiro Fujimoto[2]; Nozomi Kimura[3]; Toru Takeshita[4]; Takashi Nakajima[5]

[1] 産総研; [2] 東学大; [3] 産総研・島弧複合地質; [4] 北大・理・自然史科学; [5] 地調

[1] GSJ, AIST; [2] TGU; [3] AIST; [4] Dept. Natural History Sci., Hokkaido Univ.; [5] GSJ

断層の性質は物理条件の違いにより変わる。日本の陸上で最大の断層である中央構造線(以下 MTL)は、長い履歴を持ち、地表付近には異なる条件で形成した断層岩が露出する。従って、その内部構造解析は物理条件の違いによる多様な断層の挙動の理解につながる。

産業技術総合研究所は東南海・南海地震予測研究の一環として、平成 20 年に三重県松坂市飯高町赤桶において地下水等の観測井(飯高赤桶観測井)を整備し、この過程で MTL を貫通するコア試料(掘削長 600m)が得られ、様々な条件で形成した断層岩を含む。飯高赤桶観測井は MTL の北約 300 m に位置し、コアが得られた井戸では掘削深度 473.9 m で MTL を貫通している。コアリング終了後に BHTV 検層を実施した。

今回は深度 280-480m の部分について、コア中に見られる構造と BHTV 検層に見られる構造を照合することによりコアを定方位化し、断層岩についての記載を行った。コア中での MTL の姿勢は N58E40NW と全体の姿勢 N86W56N とは異なる。MTL の下盤側(474.9-480m)は三波川帯起源の破碎帯であり、474.5-475m、474.55-476.3m の 2 箇所断層ガウジ帯が認められる。一方、MTL の上盤側の領家帯トータル岩のマイロナイト化は不均質であり、450-474.9m と 330-370 m は比較的強いマイロナイト化を被っているのに対し、370-440m はほとんどマイロナイト化を被っていない。また、マイロナイトの面構造はほぼ東西走向北傾斜であるが、変形の強さに対応した面構造の方向の変化が認められる。

今後、微細構造解析に基づき領家帯のマイロナイトの変形条件を明らかにするとともに、断層深部での応力の不均質を明らかにしたい。また MTL 下盤側の破碎帯の内部構造を明らかにし、破碎帯形成が断層すべりに果たす役割を検討したい。